

透析患者のジェンダー別、性ホルモン(テストステロン、エストロゲン)における貧血との関連

井上朋子 小川哲也 佐倉 宏 樋口千恵子

東京女子医科大学東医療センター内科

CKD 患者において、腎疾患、貧血、心疾患が互いに影響し合い悪循環を形成する心腎貧血症候群 (Cardio - Renal - Anemia syndrome) が提唱され、腎性貧血は生命予後、QOL の低下などさまざまな病態との深い関連が示唆されている。今回 TSUBASA PROJECT で貧血とジェンダーとの関連についての研究テーマを頂き、今後以下について検討を行っていく予定である。

近年、さまざまな疾患における性差が注目されているが、透析患者の腎性貧血における性差については、報告が少ないのが現状である。性差を規定する代表的なものに性ホルモンがあるが、男性ホルモンであるテストステロンや女性ホルモンであるエストロゲンは、各臓器において多岐にわたる作用が認められている。テストステロンは古くより、造血作用においてさまざまな影響をもつことが知られ、一つはテストステロンが直接に造血細胞に作用し、その増殖や生存を促すという考えや、エリスロポエチン作用を増強するという考え、また、ヘプシジンを抑制することにより造血促進効果があるとの報告がある。また、エストロゲンには、肝臓ヘプシジン発現制御を介して、腸管鉄吸収輸送体を調整して鉄吸収に関与していることが示唆されている。

本研究では、透析患者のジェンダーならびに性ホルモン (テストステロン、エストロゲン) と貧血関連検査値 (赤血球数、Hb 値、ESA resistant index、ヘプシジンを含む鉄動態など) や炎症マーカー、透析方法などとの関連について検討する。

研究対象は東京女子医科大学東医療センターならびに関連病院において HD、online HDF、CAPD を行っている慢性腎不全患者を対象とし、目標症例数 100 名程度とする。アウトカムは主要評価項目としてジェンダー別、性ホルモン値と貧血関連データとの関連とする。現在、東京女子医科大学病院にて倫理委員会承認を受け、臨床研究開始となっている。